

【はじめに】

麻しんは感染力が極めて強く、迅速な感染対策と確定診断が求められる。現在、確定診断を行う上では、地方衛生研究所などの公的機関が実施する遺伝子検査が重要となっている。今回、2023年4月に本県では4年ぶりとなる麻しん発生事例を経験し、検査体制および蔓延防止対策の重要性を再認識したので報告する。

【事例概要】

2023年4月、海外渡航歴のある30代男性が発熱・発疹を主訴に県内医療機関の外来受診後、入院管理となった。臨床的には蚊媒介感染症を疑った検査依頼であり、麻しんは除外診断目的であった。

【材料と方法】

対象検体は咽頭ぬぐい液、全血及び尿。検査法は病原体検出マニュアル<麻疹・風疹同時検出法>に基づき実施。

【結果】

全検体から麻しんウイルス遺伝子が検出された。検体処理から結果判定までの所要時間は2時間程度であった。当

該医療機関で接触者が多数発生したが、麻しんの発生後、接触者対応や院内感染対策が実施された。県内で本事例に関連したさらなる麻しん患者の発生はなかった。

【考察】

本事例は、入院患者の麻しん罹患を遺伝子検査により早期に診断したことで、接触者の増加に歯止めをかける一助となったと考えられる。感染症流行予測調査事業によると、10-24歳群において麻しん抗体価の低下が報告されており、海外との往来が再開した現状では、麻しんが海外から持ち込まれた場合、急速な感染拡大が起こる可能性がある。特に院内感染を起こすと、入院患者が重篤化する可能性がある。また、麻しんの発生件数の減少に伴い、医療従事者の麻しん患者における臨床経験が年々減少しており、精度が高い遺伝子検査の重要性が増している。院内感染対策および蔓延防止において、迅速な麻しんの確定診断や医療従事者の予防接種歴の平時からの把握は重要であり、医療機関においても麻しんウイルスの遺伝子検査の重要性は高い。